

オーストラリア学会の設立と オーストラリア学の確立を目指して

遠 山 嘉 博

1 は じ め に

2 日間にわたる研究報告も、ここにすべて終了致しました。最後に、今回のシンポジウムの当番校としまして全体のまとめを行い、シンポジウムの今後のあり方に言及し、あわせて閉会の辞を述べたいと思います。

今回の第3回シンポジウムでは、開会の辞でもふれましたが、オーストラリア建国 200 年祭という記念すべき年であることに因んで、「オーストラリアの歴史と将来」という総合テーマを設定しました。第1日目は「オーストラリアの文化と社会」、第2日目は「オーストラリアの政治と経済」というサブ・テーマのもとに、それぞれ4本ずつ、合計8本の報告がなされました。報告の順序は、大体において、内容の年代の古いものから順に並べた形になっています。いずれもまことに内容豊富な、水準の高い報告であり、また、質問や自由討論におきましても、的を得た質の高い論議が活発に展開されました。これらを通して、報告者も聴衆もともに、オーストラリア理解を一段と水準アップすることができたものと確信致します。こうした成果はすべて、報告者、司会者、そしてシンポジウムに参加された聴衆の方々のオーストラリアについての旺盛な研究心となみなみなならぬ関心、オーストラリアをよりよく理解し、日豪両国の文化交流の促進に積極的にかかわろうとする熱意と努力のあらわれにほかなりません。

2 報告のまとめと若干のコメント

つぎに、報告の順序に従って各報告の内容を要約し、筆者なりの立場から若干のコメントを加えたいと思います（ただし、以下の各報告のテーマは、あくまでも報告時のものです。本報告書の作成に当たり、報告者がテーマを修正している場合は、それとは一致していません）。

第1日目の文化と社会に関する諸報告では、先住民アボリジニとのかかわりと、アイデンティティー確立の問題の強調が印象的でした。

小山修三先生の「オーストラリア・アボリジニ文化の復興」は、原住民アボリジニの問題を真正面から取り上げたものでした。白人の入植によってひき起こされたアボリジニの人口

の激減と固有の文化の破壊という過去の悲惨な経験、その後における彼らの文化の復興と人口増加の回復という近年の変化と将来への期待を、時系列的にフォローされました。白人による征服は、彼らにとってまことに悲惨な経験ではありましたが、そこには「征服される側の論理」もあったというのが、印象的でした。すなわち、広大な大陸に20—30人の小集団で散在して生活し、隔絶した大陸ゆえに病原菌に弱く、戦闘意欲をもたず、技術をもたず、食への準備意識や資本ももたないということでした。しかしながら、彼らが固有の芸術や儀礼を細々ながらも維持、継承し、ドリーミングという彼ら固有の観念を堅持し、政府による保護策の実施とも相まって、結果的には、混血アボリジニをも包含した彼らのアイデンティティーと文化が崩壊を免れ、維持されていることが明らかにされました。

私はオーストラリアへ行く度に、先住民アボリジニの悲劇、現在の豊かな白人社会の裏面にひそむ巨大な矛盾に思いを致すことも多々あります。もちろん、広い世界中にはこのほかにも、アメリカ・インディアンやインカ族対ヨーロッパ人、同じヨーロッパでもスコットランドやウェールズ対イングランド、バルト3国対ソ連、そしてよくいわれるアイヌ人对日本人など、類似の事例は枚挙にいとまがありません。しかし、アボリジニと白人間のさまざまな格差の大きさ、アボリジニの無力さと白人の圧倒的優位性において、オーストラリアにおける矛盾は、他のいずれの場合をも大きく陵駕するものと思われます。

とはいえ、この報告において、広大な土地の所有主として自尊心をもち、それなりに満足しているアボリジニの民族意識の健在を知り、若干救われた思いをしました。ただ、彼らの現在の居住地は概して不毛で、気象条件も悪いこと、近代文明生活になじめない彼らに対する政府の保護のあり方、一民族にとって異文化吸収能力がいかに重要であるかなど、アボリジニをめぐるのはなお多くの問題が残っていることもまた事実であります。

百々佑利子先生の「現代オーストラリア児童文学『国際アンデルセン賞の作家たち』」は、作家パトリシア・ライトソンと画家ロバート・イングベンを中心に、アボリジニと白人との関係を、児童文学において検討したものでした。私は文学者ではなく、児童文学については全くの門外漢ですので、的確な解説や批判をしようの立場にはありません。しかしながら、つぎのごとき啓発は大いに印象的でした。

すなわち、オーストラリアの児童文学においては、アボリジニとのかかわりは、素材としては決して小さいものではないこと、ライトソンはアンデルセン作家賞を、イングベンはアンデルセン画家賞を、1986年の第20回東京大会で揃って受賞したが、二人ともアボリジナル（この報告では先の小山報告とは異なり、この表現が用いられていました）の口頭伝承を素材としたという共通点をもっていること、しかし、原住民との相対し方には、客観的対応と創造性中心主義との相違がみられること、タスマニア・ネグリート・アボリジナル最後の女性トルガニニ（トルカニニとも）をモデルとした『マンガニニのはてしない旅』における原住民と

開拓者との土地観念や権利の衝突という社会的事象と、マンガニをめぐり幻想的な童話の世界との見事なまでの調和を達成した作風、そして、わが国にも相当量のオーストラリア児童文学作品の翻訳物が存在していることの驚きなどです。これらに関連して、児童文学者の背後には贖罪意識があるのか、または開拓美化意識があるのか、アボリジナルを野蛮人として書くのか、または普通の感性をもった人間として描くのかなど、児童文学がアボリジナルを対象とする時には、他の動物や自然を素材とする場合よりも、書き手の出自や思想が色濃く反映されるのではないかと考えたことでした。

金田章裕先生の「オーストラリアの開拓と土地計画」は、19世紀中葉頃までの白人による植民時代の開拓と土地計画の実施が、各州ごとにそれぞれ特有の方格プランに基づいてなされていった過程を概観し、比較検討したものでした。本国政府の規定のもとに、自由移民や解放流刑者などさまざまな資格の入植者に対し、それぞれに一定の土地を下付する際の入植地の分布や土地区画は、各州の地形条件、歴代の総督や測量官の個性や考え方などの相違のもとに、かなり違ったものであったことが明らかにされました。その半面、土地計画はいつでも何らかの方格プランを中心に進められたこと、その際、たとえば1マイル方格の設定の不正確性、オーストラリアにおける水の大切さ、水による土地の価値規定などの共通性が読みとれた報告であったと思われます。これらの初期の土地計画は、現在のオーストラリアの都市や農牧地の計画や成立にきわめて大きな影響をもつものであることも、あわせて類推されました。

こうした初期の自由な土地計画の立案と実施は、オーストラリアの土地の広大さ、それに比して無人状態に近い先住民の稀薄さと無力さといった条件下においてこそ、実行可能であったと思われます。したがって、報告では言及されませんでした。ここでもまた、アボリジニとの関連に思いが致されるのであります。百々先生の報告にあったアボリジニの土地共同所有の考えから、近代社会の土地個人所有へと、変化が大規模に進められたわけであり、アボリジニから入植者への所有者の変化と、共同所有から個人所有への所有形態の変化という2重の変革が実施されたのです。いずれにせよ、土地の所有形態こそは、その社会制度のありようを反映する基本的要因であることは、今も昔も変わりはないと考えさせられました。

梶原景昭先生の「文化的多元主義とナショナリズム」は、オーストラリアにおけるアイデンティティーの問題を、オーストラリアの文化的多元主義とのからみで論じたものでした。長い白豪主義から脱したオーストラリアが、アジアやアフリカからも多様な移民を受け入れるようになったことによって、いやがおうでも直面せざるをえなくなった文化的多元主義の問題、複数文化の共存の許容のもとに、国家的アイデンティティーを形成していこうとする

文化的多元主義政策、それとオーストラリアン・ナショナリズムとの関係——これらの問題をヨーロッパ系入植 200 年のこの機会に考え直し、整理してみようとされたものと思われます。

ヨーロッパの旧社会との差異の強調によるオーストラリアのアイデンティティーの確立の問題については、オーストラリアの白人の意見も聞いてみたい気がしました。こういったことも考え合わせると、パネラーに日本語のできるオーストラリア人を加えることも、十分意義のあることと思われます。じつはこれについては、今回の企画委員会でも意見が出され、物色してはみたのですが、適当な人物が見つからなかったため、今回は実現しなかったという経緯があります。また、報告では言及されませんでした。オーストラリアの国家的アイデンティティーとともに、アボリジニの民族的アイデンティティーも、一考すべき重要な問題と考えます。

わが国の社会は、過去長期間にわたり、そして現在においても、単一民族で構成されてきており、モノカルチャーの経験しかないのですが、オーストラリアの直面している状況は、これといかに大きく異なるかが痛感されます。しかしながら、国際化の名のもとに、民族的にも文化的にも、多元化の時代への脱皮を迫られようとしているのが、現在のわれわれの状況であります。そうすると、オーストラリアの白豪主義から文化的多元主義への政策転換は、一つの大きな先駆的実験として、そこから貴重な教訓を学びとることができるのではないかと考えさせられた次第です。

第 2 日目の政治と経済に関する諸報告では、オーストラリアの基本政策としての保護主義と、その結果としての無競争状態への安住の指摘が共通してみられたと考えます。

山中雅夫先生の「オーストラリア鉱業と企業者活動の史的スケッチ」は、1801 年のニューカッスルにおける官営石炭採掘事業に始まり、時代とともに地域と鉱物種類に広がりをみせていったオーストラリア鉱業の発達を、全時代的にまとめて紹介したものであります。第 1 次大戦までの 100 年間、鉱業は急速な発展と繁栄を謳歌し、その結果、州によっては鉱業は農牧畜産物をしのぐ最大の輸出品目となり、また、鉱山会社では驚異的な高配当が実施されたことなどが明らかにされました。にもかかわらず、第 1 次大戦後 1960 年までは、鉱業は長期低迷期に入ってしまい、鉱山会社の業績の悪化や、鉱業に対する人気のなさ（たとえば自然環境の破壊者であるとか、海外資本による所有と支配に対する国民の反発とか、要するに鉱業のイメージの低下）が生起しているという、何とも皮肉なこの 200 年間の変遷が読みとれました。

オーストラリアの鉱業史において、初期のニューサウスウェールズにおける石炭産業の官営による、のちには民営における独占の支配、19 世紀中葉からの鉱山労働者および鉱山管

理方式におけるイギリス系の独占的支配など、オーストラリアにおける独占という特徴の一端が、ここにもよくあらわれていると思われます。また、オーストラリアで1960年以降鉱業は、輸出と経済成長に重要な役割を果たしてきたにもかかわらず、イメージが低下しているとの指摘からは、わが国で第2次大戦後重化学工業が、国際収支の好転や高度成長に大きく貢献したにもかかわらず、公害やNIESとの競争で苦しい局面に立たされているのと相通じる皮肉な運命を感じさせられました。しかしその半面、わが国では近年、鉱山会社や鉄鋼メーカーがリストラクチャリングによる再生を果たしつつありますが、オーストラリアの鉱業にこうした果敢な変身を期待しうるだろうかといった相違にも、私の思考は延伸してきました。

私は飛行機でオーストラリア各地を移動した際、眼下に広がる不毛の土地の広大さに驚嘆するとともに、その開発のポテンシャルティー、地下に眠っているやもしれぬ鉱物資源の潜在的可能性に、あれこれと思いをめぐらせたものでした。オーストラリアは資源小国の日本にとって重要な鉱物資源の供給国として、また、日本はオーストラリアにとって重要な鉱物の需要家として、それぞれ相互補完の重要な相手国に違いないとの実感を改めて強くさせられた報告でありました。

鈴木雄雅先生の「マス・メディアの寡占化と表現の自由をめぐる問題」は、オーストラリアのマス・メディア市場の特質、すなわち少数の所有主による寡占化の傾向が、本来的、伝統的なものであるだけでなく、近年それはいっそう強化されているという特徴を紹介し、それが意見の多様性の保証の困難化、情報の限定化あるいは一元化などを通して、表現の自由を脅かすことになりはしないかとの危惧を表明し、警鐘を鳴らしたものと思います。これは、わが国の現状とはきわめて対照的だと思われますが、国土に比して少ない人口、その人口の極度の地域的偏在性、メディア産業における買収の盛行など、わが国とは大きく異なる産業条件が背景にあると考えられます。

本報告を通して、諸産業における独占、寡占状態の一般化というオーストラリアの特徴は、マス・メディアの分野においても例外ではないことの発見もさることながら、メディア概念の拡大にもかかわらず、メディアの複合的所有状態が寡占状況をいっそう強化していること、その結果、民主主義の根底ともいうべき言論の自由、表現の自由、そして近年重要性を増している情報の多様性に暗い影が生じるのではないかとの社会学的観点からの指摘は、きわめて新鮮かつ印象的でした。経済学や経営学の分野では、独占の弊害は通常、生産の量的制限や効率の低下、生産物価格の不当な釣り上げなどの面において問題とされるのですが、この報告はメディア産業におけるそういった効率や価格についてはなしに、表現の自由といった観点から問題にされた点が、私にとっては非常に啓発的でした。しかし半面、価格や効率面で独占の弊害の懸念の要はないのかとの疑問に、私は自分の専門領域における研究上

の習性から直ちに思い至りました。報告では新聞業界が中心になっていましたが、放送など電波によるマス・メディアについても、またの機会にぜひ伺いたいものと思いました。

阿部雅俊先生と鈴木英夫先生による共同報告「オーストラリア産業構造再編成」は、オーストラリアの製造業が過去長期間にわたり、保護の壁のなかで他の工業諸国との競争を免れて成長、発展してきた過程を明らかにしたものでした。こうした政府の手厚い保護政策は、競争力の弱い産業の労働者の雇用の確保や国内資本の保護に貢献した半面、外国との競争の回避による国際競争力育成の不足や、資本不足のオーストラリアに流入してくる外国資本をも保護するといった皮肉な結果をもたらすなどの問題を露呈するに至っています。さらに、1970年代以降、アジアの中進国や低開発諸国との貿易が拡大するにつれて、これらの国からの保護削減の要求が高まってきています。こうして、産業をより市場原理に合致した構造に再編成していくことを必要とする圧力が、内側からも外側からも高まってきていますが、オーストラリアがアジア太平洋地域の国際関係に積極的に参加していくうえで、内圧よりも外圧ははるかに強いという指摘でありました。

オーストラリアの保護主義、その結果としての競争のなさの矛盾が最も典型的にあらわれているのは、製造業部門においてでありましょう。弱い製造業を厳しい国際競争から保護しようとする政策は、その間に製造業を育成、発展させようとする政策本来の意図とは逆に、経営者や労働者の保護への甘えを生み、競争力のなさがさらに高水準の保護を要求、必要とするという悪循環に陥っていることは、私もこれまでいろいろな機会に指摘してきたところであります。これはまさに、わが国の農業と農業保護についても当てはまることです。保護の矛盾については、オーストラリアの政府当局者だけでなく、製造業経営者や労働運動家の間にもかなりの自覚と反省がみられるようになっており、具体的対応策にコミットせざるをえない状況に至っているとのことですが、これもまた、わが国の米、牛肉、オレンジなどの農産物の貿易自由化が現在、好むと好まざるとにかかわらず、実施へ向けての厳しい自覚を政府、農業団体、農民の間に醸成しつつあるのと好一対をなすものといえるでしょう。いずれの国においても産業保護政策は、それが意図した本来の目的よりも、意図せざる付随的弊害の方が強く出てきがちとなること、しかしながら保護の撤廃は、選挙制度に基づく民主的政治体制をとる限り、内圧による自発的行為によってではなく、むしろ外圧による強制によってしぶしぶなされる傾向が強いことなどを再認識した次第です。

竹田いさみ先生の「オーストラリアの第3世界外交と開発援助政策」は、オーストラリアの第3世界外交を東南アジアを中心とした発展途上国との関係に総合的な政策体系として位置づけ、これら発展途上国への援助政策が、1950—60年代の冷戦構造下とそれ以後とでは、境目の1960年代末から70年代初期における国際環境の変化によって大幅な修正、変化を生

じたことを明らかにしたものでありました。具体的には、(1)第3世界外交の基軸が、以前の米ソ東西関係を基本とする東西軸から、アジア情勢の変化に伴い、南北軸へと質的転換をとげたこと、(2)東南アジア向け援助は、それまでの軍事的、戦略的色彩の強いものから、その後は貿易、投資、移民・難民など経済的相互依存関係の形成を志向するものになったこと、(3)援助の地理的配分の問題、すなわち、オーストラリアの財政の悪化のために、過度の寛容性を続ける余裕がなくなったことから、援助対象国の上位10カ国をすべて包含する東南アジア諸国間での優先順位の確定が、援助政策の重要問題となっていることなどが、報告の中心的論点であったと思われます。

オーストラリアがアジアの一員として生きていくことを基本方針として明示している現在、東南アジア諸国向けの外交および援助政策は、きわめて重要な意味をもつ問題であると考えられます。オーストラリアにとってそれは、日本との相互依存関係もさることながら、オーストラリアの政治的、経済的将来を大きく規定する要素になるものと思われます。東南アジアの政情不安定を背景にもつ1960年代までは、オーストラリアの対東南アジア関係は、安全保障を中心にすえたものでありましたが、米中接近やベトナムからのアメリカ撤退を背景とする1970年代以降は、経済開発援助を中心とする新しい協力関係の構築へと質的転換がとげられており、援助政策においては、今後もこの方向が強化されるであろうと、将来の見通しを明確に述べられた点が印象的でした。

3 今回のシンポジウムの特徴

——諸報告に共通する問題意識——

つぎに、以上の各報告の要旨の紹介から、今回のシンポジウムの特徴ともいえるべきそこに共通する問題意識を抽出し、コメントしたいと思います。

オーストラリアの歴史を究明し、それを理解するうえで、先住民アボリジニとイギリス人入植者とのかかわりの解明は、避けて通ることができません。この意味で、「アボリジニ」そのものに関する報告や、アボリジニに深くかかわった報告がいくつかみられたことは、今回のシンポジウムの第1の特徴であったといえるでしょう。第1回のシンポジウムでは、アボリジニに関する報告は皆無でした。第2回では、原住民語に関する報告が一つありましたが、これは原住民語の衰退、原住民の語学的側面を検討したものであり、白人との歴史的かかわりや、原住民の文化や社会生活そのものを取り上げたものではありませんでした。今回は、白人によって書かれたオーストラリア200年の歴史の回顧において、原住民の生活そのものの変化や白人とのかかわりを直接に問題としたものはいくつかみられたのであり、これが今回のシンポジウムの大きな特色をなしているのではないかと思います。

共通する第2の問題として、「アイデンティティー」の問題が注目されます。一方ではア

ボリジニのアイデンティティーの問題があり、他方では、ヨーロッパから分離したオーストラリア白人社会のアイデンティティーの問題、とくに、白豪主義放棄後の文化的多元主義下における彼らのアイデンティティー確立の問題があると考えられます。オーストラリアにおけるこれら二つのアイデンティティーの確立の問題は、アボリジニに関する報告においても、文化的多元主義に関する報告においても、ともに重要な問題として意識され、論じられていたことが特徴的であったと考えます。

第3は、とくに第2日目の諸報告を通して共通にみられた「保護主義」の問題、そしてその結果としての「競争なき温室社会」がもたらすメリットとデメリットの問題であろうかと思えます。広大な国土で人口が少なく、消費地がそれぞれ大きく隔絶しているオーストラリアでは、無競争状態はもともと生得的なものであったかもしれませんが、しかし、諸報告では共通して、そのメリットよりもデメリットの側面が重視され、しかも、保護と無競争温室状態にあるオーストラリアの社会、経済において、そのデメリットが近年ますます増幅されてきており、従来の上までは将来の発展も期しがたいのではないかとの危機意識が、かなり深刻に共通して看取されました。このような受けとめ方は、それとは対極的な日本の戦後の経過および現状に照らしてみても当然のことでありましょうし、私自身もオーストラリア研究とオーストラリア訪問を通して、たえず痛感してきているところでもあります。戦後日本の経済発展の根底には、個人間、会社間、国家間の激しい競争意識、競争に打ち勝とうとする旺盛な意欲と苦しい努力があり、それは一方において、公害や静かな生活の破壊といったデメリットも生じはしたけれども、他方において、生活水準の向上や国家的 prestige の高揚といった重要なメリットをもたらしました。これとは反対にオーストラリアでは、もともとの高い生活水準とその長期的維持を可能にした豊かな自然の恵みに安住するのあまり、経済発展の相対的遅れのもとに、経済面での国際的地位の後退、さらには国際社会における国の総合的地位の相対的低落が危惧されなければならない状態や時期に至っているといえなくないと思われます。その意味でも、諸報告が直接、間接にふれたこの問題は、オーストラリアの歴史の回顧と将来の展望において、きわめて重要な、意義深いポイントであったと考えます。

第4に、すべての報告を通して指摘しうるることとして、報告の大部分が歴史的検討に費やされてしまい、将来展望への言及はかなり手薄になったことがあります。オーストラリアの歴史的回顾から現状分析まではかなり詳細かつ鮮明になされたけれども、将来の見通しについては明確な分析や予測はあまりなく、したがって、あるべきまたは望ましい理想像のスケッチやその実現のための政策提言には乏しかったうらみがあります。しかしながら、このことは逆説的には、「歴史的分析をしますから、将来についてはそれを素材にして各人で考えてみて下さい」という宿題が、報告者からシンポジウム参加者の一人一人に課せられたものと解釈することもできるでしょう。

第5に、将来展望に関する言及は量的には少なかったとはいえ、将来に関する重要な指摘もいくつかみられましたが、不思議なことに、それらのすべては明るい将来展望ではなしに、暗い予想や悲観的予測ばかりであった点です。これは、学問研究に携わる者の批判精神からすれば当然のことかもしれませんが、きわめて重要な、注目すべき一致ではないでしょうか。オーストラリア鉱業の1970年代における急成長から80年代における低迷と空洞化、マス・メディアの寡占化がもたらす意見や情報の伝達における限定化・一元化に伴う表現の自由に関する危機感、保護に慣れきったオーストラリア製造業が保護削減の外圧に直面している不安など、いずれも楽観禁物の暗い展望ばかりであったように思われます。これは、これまでのオーストラリアがあまりにもラッキー・カントリーであったこと、しかしながら、世界の政治的、経済的情勢の変化がそのラッキーさの基盤をゆるがし始めていること、国際化時代にアジアの一員として生きていくには、そのラッキーさにいつまでも浸ってばかりはいられないこと等への警鐘乱打であったかもしれません。大げさにいえば、隔絶した閉鎖的大陸に白人がやってきた際にアボリジニが経験した200年前の苦難が、世界に開放され、とくにアジアと同化しなければならなくなった国際化の時代を迎えた現在、別の形で再現しようとしているのかもしれませんが（過去200年間の蓄積を考えれば、もちろんこれは誇大表現にほかなりませんが）、諸報告に共通してみられたオーストラリアの将来に関するどちらかという暗い展望については、オーストラリア人自身の意見もぜひ聞いてみたいものだと思います。

4 オーストラリア学会の設立とオーストラリア学の確立を目指して

ところで、200年の歴史を経たオーストラリアの将来もさることながら、3年の歴史しかもないとはいえ、われわれのシンポジウムの将来もまたいささか気になるところであります。これにつきましては、これまで企画委員会でも若干の論議を重ねてきており、シンポジウムの学会への発展的改組については、それなりにかなりの機運も盛り上がってきております。今日のこのシンポジウムの閉会後に企画委員会を開いて、最終的な相談をすることになっておりますが、オーストラリア研究者間における研究のよりよい促進とわが国におけるオーストラリア理解のいっそうの拡大、深化に最もよく貢献しうるような形態のものを追求したい考えであります。ただ一つ、この有益なシンポジウムが今回限りで終わってしまうということは決してありえないということだけは、ここではっきり明言しておきたいと思います。

ちなみに、今回のシンポジウムに先立って、私の方で企画委員に出欠調査を出しました際に、学会設立に関する予備的意見調査をしましたが、その結果をここに紹介しますと、大略つぎのようでありました。総数26名の方にご意見を伺いましたところ、返事のなかった4名を除き、8割近い方（16名）が学会の設立に賛意を表明しておられます。残りの方は記入

がなかったのであり、明確な反対意見を述べられた方はありませんでした。学会設立に賛成の理由としては、(1) 現在の形のシンポジウムをこのまま継続しても限界があり、何らかの形の新しい組織的發展を考える時期にきていること、(2) 学会として組織が確立され、公的認知を得て大きくなることにより、対政府の発言権も公的に確立され、またオーストラリアの学会との交流も可能になること、(3) 学会費の徴収により豪日交流基金の資金的負担が軽減され、真に独立した組織となりうることなどがあげられていました。学会を作る際に注意すべき点として、とくに多くの方々の指摘がみられたのは、つぎの2点でした。第1に、学会に発展させるとしても、学界人だけの集りとするのではなく、一般の人たちや若い人たちにも広く開かれたものとする（6名）、第2に、地域学会は本来学際的でなければならない、多分野にわたる学際的な性格をもった学会にすべきである（6名）ということです。さまざま意見のなかでこの2点に関しては、それぞれ3分の1ほどの方が共通して指摘しておられました。

ここから、将来の「オーストラリア学会」の望ましい姿またはあるべき像が、自ら明らかになってくると思われます。第1に、それは多くの人々に広く開かれた学会であるべきだということです。わが国の学会の多くは、単に当該学問分野の専門研究者の集りにすぎない形をとっているのが通常ですが、形成されるべきオーストラリア学会は、オーストラリア研究の促進や情報交換の場となるという目的だけではなく、わが国におけるオーストラリア理解の促進という使命をもち、若い世代やオーストラリアに絶大な関心と友好の念をもつ研究者以外の人々にも参加しやすいものでなければなりません。そのためには、入会資格をとやかく問うのではなく、また、会費はできるだけ安いことが望ましいと思われます。学会運営の具体策は今後の検討にまたなければなりません。専門研究発表だけでなく、シンポジウム形式のものも残して、両者の併存を図るのも一法かと存じます。

第2に、オーストラリア学会は地域学会として、オーストラリア（およびその周辺地域ないし関連地域）を固有の研究対象とし、オーストラリアをさまざまな専門分野から多角的、多面的に検討する学際的な学会でなければならないということです。わが国の学会は従来専門分野ごとに形成され、そこで日本や世界各国の歴史や実情や問題点を当該の専門的観点から研究し、交流を展開するというのが通常の形態でありましたが、それとは違って、オーストラリアをさまざまな学問的関心から多面的に研究する学会であるということです。そこにおいては各人は、固有の専門分野以外の研究や考え方にも接することができ、それによる刺激と啓発を通して、自らの専門研究にいっそうの幅と深みを付加し、また、オールラウンドなオーストラリア理解を醸成しようということが期待されます。このような学会のあり方は、学際的地域学会においてこそ可能なものであり、わが国におけるさまざまな学会の間で一大特長をなすに違いないと思われます。

第3に、オーストラリア学会は国際性をもつ学会となることです。日本国内の研究者や関

心の深い人たちの集りにとどまるのではなく、オーストラリアの学会や政府機関との研究上の交流、さらには日本に関心をもつオーストラリアの人たちとの友好的交流をも展開することにより、日豪間の文化交流と友好促進のかけ橋としての役割をも果たすものであることが望まれます。

オーストラリア学会の以上に述べた想像される姿は、これまでのシンポジウムのあり方からも当然に帰納されるものであることは、十分わかり頂けると思います。

このようなオーストラリア学会が設立されますと、わが国における「オーストラリア学」ともいべきものの論郭なり特質なりも、自然と明らかになってくるでしょう。オーストラリア学という学問体系がわが国に明確に確立しているわけではありませんが、これまでの3回のシンポジウムの内容や今回のシンポジウムの上述の全体総括から、その内容はおぼろげながらも明らかであると思われます。また、学会の設立により、その姿は学会の性格や運営を反映しながら形成されていくものと思われます。いずれにせよ、多様な専門領域の研究者がそれぞれの分野において進めるオーストラリア研究の一つ一つが、オーストラリア学確立のためのブロックとなり、これらの専門家が専門領域を越えてオーストラリア学会で情報交換と相互啓発に精励することにより、ブロックとブロックのすき間はしっかりと固められて、全体としてオーストラリア学という構造物をしっかりと確立するに至るのではないかと考えます。さらに、日本におけるオーストラリア学は、オーストラリアにおける日本学と相携さえて、太平洋を南北につなぐ大きな架橋を完成し、日豪文化交流と相互理解に大きく貢献することになると期待されます。

5 閉 会 の 辞

アラン・トーマスさんが最初にいわれたように、この200年間にオーストラリアではいろいろな変化のあったことが、今回のシンポジウムを通して明らかになりました。わが国もまた、徳川末期から明治以来の200年の間に大きな変化をとげましたが、オーストラリアの変化はそれとはかなり異質のものであること、その結果として、今日のオーストラリアはオーストラリア固有の、日本とは異なる多くの問題を抱えていることが明らかとなりました。研究者の批判精神の然らしむるところからか、オーストラリアの将来については問題指摘が多くなされましたが、今後もオーストラリアはこれらの問題解決に努め、よりよき発展をとげていくものと思われます。そして、われわれは日本の将来のために、そのなかから多くを学びとることができるであろうことは明かです。

2日間のシンポジウムを通して、研究者はそれぞれ研究上の貴重な刺激と啓発を受けたことは明らかであり、また一般参加者はオーストラリア理解をいっそう深めることができたことは疑いないと思います。これらは将来、何らかの形で必ずや、日豪両国の間の相互理解と

友好促進に有益に反映されるものと確信致します。

最後に、自己宣伝めいてはなはだ恐縮ですが、追手門学院大学のオーストラリア図書室には、オーストラリア研究所の乏しい予算で細々ながらオーストラリア関係図書の収集と充実に努めており、また、豪日交流基金やオーストラリア大使館、さらにはオーストラリア国立大学などの好意あふれる図書寄贈も受けております。その結果、オーストラリア関係図書に関しては、西日本で最も豊富な蔵書となっていると思います。学外の方々も、研究者、一般の方を問わず閲覧可能であり、貸与も致しますゆえ、広くご利用頂きたい旨を申し上げ、図書寄贈への返礼の言葉と致します。報告者、司会者、そして最後まで熱心に参加して下さい皆様方に厚くお礼申し上げ、閉会の辞と致します。

For the Establishment of the Australian Society and Australianology in Japan

—Summary and a Closing Address—

Yoshihiro Tōyama

(Organizer of the Symposium)

(Director, the Center for Australian
Studies, Otemon Gakuin University)

Through the two day's symposium, the reporters and the audience surely deepened and widened their understanding about Australia, the present writer firmly believes.

This is our third symposium. Some characteristics which distinguish it from the past two symposiums are as follows:

(1) There were several remarkable reports concerning the "Aborigine." In order to study and understand Australian history fully, we must examine the Caucasian's relationship to the Aborigine. This problem was ignored in past symposiums with the exception of a report about Aboriginal language. This time it was taken up directly in Mr. Koyama's and Mrs. Momo's presentations, who analyzed it through different point of view, and indirectly in various other reports.

(2) The problem of "identity" attracted our attention. There are two identity crisis in Australia: the Aborigine's identity in the white Australian society on the one hand, and the white Australian identity under multiculturalism after the abolition of the white Australia policy on the other hand. Mr. Koyama considered the former and Mr. Kajiware the latter.

(3) The third common critical view was "protectionism" in Australia. A "hothouse society" as a result of protectionism has produced negative as well as affirmative results, but the former is growing more and more in recent years, for example, the country's slow economic growth, her weakening international competitiveness, her decline of economic status in the world, etc. This makes a remarkable contrast with post-war Japan where people and companies have been in keen competition for success. In this writer's view, Austrlia has come to a stage where she cannot live in

peace in a protected hothouse. She must do open the door to Asia and live as a fully participating member of the family of Asia.

(4) All reporters presented a historical discussion and fully analysed the contemporary condition. However, their discussion of future prospective was not so clear, and there was few political proposals for the Australian future. Taking the general theme "History and the Future of Australia" into consideration, the writer felt that something was missing in our reports. But this may mean it is the audience's responsibility to think about the Australian future for themselves.

(5) Though the reporters' reference to the Australian future was not frequent, the writer found some important implications. Surprisingly, the pictures the reporters drew of Australia's future were not bright; they were either a dismal prospective or a pessimistic prospect. This must be a very important point that we should note, the writer thinks. Many industries have some serious problems, for example, poor public favour in the mining industry, a strong external pressure on the manufacturing industry to reduce the protection, the crisis of freedom of expression due to the oligopolistic mass media, etc. The writer found these pessimistic perspectives in the reports of Mr. Yamanaka, Mr. H. Suzuki and Mr. Abe, and Mr. Y. Suzuki.

Australia has a two hundred-year history behind it, and its future worries us. Our Australian Studies Symposium has only a three-year history, very short indeed compared with Australian history, but the future of the Symposium weighs heavily on our mind equally. We have discussed its future in the Planning Committee and there is a strong tendency among us to develop it to a formal academic society. Before this symposium was held, the writer made an inquiry concerning its future to all members of the Planning Committee, and found eighty percent agreed to form a new academic society. Sixteen among twenty-two members agreed to make the symposium a formal academic society and four did not respond. No one raised an objection against it.

Among the agreements the following factors were clear: (1) this form of symposium has a limit to develop itself farther; (2) to be a formal academic society will gain a formal acknowledgement and a right to speak more; and (3) it will gain organizational independence if it becomes a formal society.

Summarizing the discussion, the writer thinks that the future Australian Society must be (1) open to many persons, not only to academic specialists but to the general public who have an interest in Australia, (2) interdisciplinary as a regional

society to research Australia across many special fields of study, and (3) international to conduct research exchange with academic societies, governments and people in Australia who are interested in Japan, with the object to be a bridge between Japan and Australia.

Lastly the writer expresses his thanks to the reporters, the chairman and the participants including some from Australia, with an encouragement to use the Australian library of Otemon Gakuin University, the richest collection of Australian books and pamphlets in Western Japan.